

Title	E・H・カー著 浪漫的亡命者たち
Sub Title	E.H. Carr: The romantic exiles, 1933
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.6 (1954. 6) ,p.690(104)- 692(106)
JaLC DOI	10.14991/001.19540600-0104
Abstract	
Notes	紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540600-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

E・H・カー著「浪漫的亡命者たち」

酒井只男譯 (E. H. Carr: The Romantic Exiles, 1933)

飯田 鼎

一

最近の英國ではロシア社會思想史の研究が盛んのようにであるが、そのなかでE・H・カーの名前は目立つて有名になろうとしている。われわれもすでに「革命の研究」や「西歐を衝くソ連」などの邦譯書によつて彼の業績の一端にふれることができたがしかしカーをロシア研究者として第一人者たらしめたものは、あの「ボルシェヴィキ革命」(Bolshevik Revolution, 3 Vols, 1950~1953)の老大なそして精力的な研究であつたことは異論がなからう。カーは一八九二年生れであるから本年六十二歳を迎えたわけである。政治學者としては正に圓熟の境地に入つたと云うことができよう。彼はケンブリッジ大學卒業後外交官生活に入つたが、一九三六年外交官をやめて學究生活に轉じ、ウエルズ大學の政治學教授となつて現在に及んでいる。すでに一九三一年、ドストエフスキー傳(中橋一夫・松村達雄共譯)を

書き傳記者としてのなみなならぬ才能を世に示したことを見ても、彼がロシア問題に深い興味をいだくようになったのは外交官在任當時であつたと思われる。この「浪漫的亡命者たち」は處女作「ドストエフスキー」につぐ彼の若い時代の著作であつて、その内容は題名にふさわしく浪漫的で悲劇的でさえある。しかしそのなかに利用されている資料の豊富さは讀む者をおどろかし、そこに描かれた十九世紀ロシアの革命家たちの赤裸々な人間像は、およそ人間の悲劇とはどのようなものであるかを身にしみて感じさせるであらう。まことに譯者も云つているように、この書は「十九世紀の最も生々とした最も痛ましい人間の研究」である。しかし讀者は、快くこの本を讀み終えることができよう。著者カーの博識と譯文の流麗さにみちびかれて。

※ ※ ※ ※ ※

われわれが思想史(學說史をも含めて)を研究しようとするとき、思想の歴史的な發展を系譜的に探ろうとする場合と、ある思想家の生涯に重きをおきその人物を中心として時代的な背景をとらえようとする場合と、大體以上の二つに大別することができよう。云うまでもなくこの兩者はきり離すことのできない關係に立つているのだが、いわば前者は思想の流れに重きをおき、後者はその思想家の行動に重きをおくものであつて、もしカーの思想史における考え方がそのいずれに近いかと問われるならば、後者であると答えることができるのではないだろうか。

二

およそ悲劇といわれるものが、その時代のその社會の庶民の生活をはなれて存在しないとすれば、ある時代のそして一つの社會の悲劇は、その後の時代そして別の社會にとつてはもはや悲劇ではなく喜劇であるかもしれない。悲劇と喜劇の差は實に紙一重ではないだろうか。なぜならそれはその主人公が生きた時代、そして彼が生活していた社會によつて、ある場合は喜劇となり、ある場合は悲劇となるからである。ここに登場する十九世紀ロシアの革命家たち——ゲルツェン、オガリョフそしてバクーニン——はこういう意味でいわば悲劇の主人公であつたのだ。もしも彼等が同じ時代のイギリス、ヴィクトリア時代に生れて資本主義の黄金時代に呼吸したとすれば、革命家になつたにせよ彼等の運命はいちじるしくちがつたものとなつたであらう。云いかえればヨーロッパに亡命して祖國の革命運動をたすけようとしたこれらの人たちをも含めて、ロシア革命家たちの悲劇はそのまま十九世紀のロシア民衆の悲劇にほかならなかつた。すなわちゲルツェンの苦惱はツァーリ制度へのはげしい反抗の結果であり、オガリョフの悲痛は農奴制に對する道義的な憎しみのためであつたのだ。彼等は富裕な貴族社會に人となりながら、封建的なツァーリズムの支配する息苦しい祖國ロシアに愛想をつかして、自由な西ヨーロッパに放浪の生活をつづけた。ロシア貴族という名譽と莫大な富に支えられた彼等の運動

E・H・カー著「浪漫的亡命者たち」

は、ともかくも祖國ロシアの革命運動に大きな影響を及ぼし、その機關雜誌「鐘」は一時多くの青年たちをひきつけた。

だがブルジョアのな富にささえられたゲルツェンたちの生活は、たとえその言動がどれほど急進的であつたにせよ、同じ時代にあつて活躍したマルクスやエンゲルスのそのように、革命の苦難というものを身をもつて體驗したというあの深刻さをおびなかつた。

ゲルツェンは一八五五年二月、一八四八年の革命の國際的な記念祭にマルクスを招待したとき、マルクスはエンゲルスにあつてつぎのように書いたことはまことに興味深い。すなわち、「私はどこでもまたいつでもゲルツェンと同じ演壇に上りたくない。私は老いたるヨーロッパがロシアの血によつて若返るはずがないと思つてゐるからだ」と。(譯書一五五頁)著者がロマンチックと云つたのはこのような意味からであらうか。信條としての自由主義的社會主義と生活態度としての貴族趣味とを一致させようとする彼等の行動は、つねに色々な矛盾と苦悶によつてあやなされてゐた。そしてその最もいちじるしい例は彼等の私生活にあらわれたのだ。ゲルツェンの妻ナタリヤとドイツの詩人ゲオルグ・ヘルヴェークとの三角關係、更にナタリヤが死んだのち、ゲルツェンと親友オガリョフの妻ナタリヤとの戀、絶望したオガリョフと情婦メアリー・サザランドとのただれた慾情、またともすれば革命運動を喰ひ物にするかと思えるバクーニンとその周囲の人たち、このような史實の蔭にかくれ

た彼等の行動が赤裸々にわれわれの前にもち出されるとき人間の悲劇について深く考えさせられるとともに、あらゆる大事業——いうまでもなく革命をもふくめて——の背後にいかにか多くの愛慾、怨恨そして苦惱がひそんでいるかを知ることができよう。革命という巨大な幻影にかくれて存在するこれらの葛藤は、人間とつてさげがたいものであろうか。カーはこうした悲劇をむしろ人間に宿命的であるかのように描いている。果してゲルツェンをはじめこのロシアの革命家たちの悲劇はそれほど悲愴なものであり、時代をこえて、いつまでも悲劇として受け入れられるものであろうか。著者はこの書のなかではこの問には答えてくれないが、要するにこれは温い同情をもつて書きつづられている傳記であつて、社會思想史の文獻であるよりは文學的な香気ゆたかな作品である。その小説にもまさるすぐれた敘述は、政治學者としての著者よりも歴史家としての若いカーを想い出させるに充分であるが、しかしここにはまだ後にあられた革命に對する鋭い洞察力はわずかに萌芽的にしかあらわれていないようである。

さてゲルツェンは思想史上にどのような地位をしめるものであろうか。たしかにゲルツェンはフリーエの流れを汲む空想的社會主義者であつた。しかしながらこれは必ずしもゲルツェンの果した役割が反動的なものであつたという意味ではない。いやむしろマルクス主義がロシアに入つてくる前のすぐれた自由主義者、チエルヌイシェフスキーとともにロシア革命運動にとつて

は忘れたい思想家の一人であつた。レーニンも云つてゐるように、「デカブリストは若い世代を新しい生活へ呼びおこし、弾壓と奴隷根性の環境のなかに生れた子供たちを清めるためにあきらかな死を覺悟してそれに向つて進んで行つた騎士たちであり、偉大な事業のための戦士たちであつたのだ。」まことにデカブリストの反亂はゲルツェンを呼びおこし、「清めた」のである。ゲルツェンは專制政治のもとにあえぐ自由主義者に宿命的な懷疑主義から、終生のがれることができなかった。すなわちゲルツェンは辯證法的唯物論のすぐそばまで近づき、そして史的唯物論の前で停止したのである。ゲルツェンの空想的要素よりも、革命的な精神こそ高く評價されるべきであらう。

- (1) ゲルツェン著「過去と思索」七頁、金子幸彦譯、
- (2) 十九世紀初期一八二五年十二月十四日ロシアの自由主義的な貴族たちが、秘密結社を組織してツァーリズムに反抗した。これは失敗に終つたが、若い世代に深刻な影響をあたえた。(筑摩書房) (定價五〇〇圓)

一九五四、四、二一

論文紹介

小賣 商業

—その總括的一素描—

“Retailing: An Aggregate Picture” By

J. D. Butterworth (Marketing: Current

Problems and Theories, pp. 139-156)

此處にとり上げた論文はオットեսン教授の編纂になる論文集「マーケティング——その現代的課題と理論」の中に收められたものの一つであるが、同書にはナイストローム博士の「小賣商業の趨勢と費用に關する考察」(Observations on Retailing and Costs)と題する論文が收められている。そしてバターウォース教授の此の論文は、ナイストローム博士の右の論文と相互補完の關係に立つものであり、教授自身がその冒頭に述べている如く、「一九二九年以降の若干の小賣經營グループについてみられたその相對的地位の變化を問題としつつナイストローム博士の所説を補わんとする」ものである。即ち此の論文は「絶えず變化して行く小賣商業の全パノラマを問題としようとすものではなく、一九二九年より一九五一年に至る間における特定の經營グループについてその變化してゆく販賣高の記述と分析」に焦點を合わせて問題の展開をはかろうとするのである。

論文紹介

從來或る種の小賣經營グループの相對的地位が問われる時はその經營グループの販賣高を總小賣販賣高並びに國民所得と對比せしめることによつて判断せられる場合が多かつたのであるが、しかし此の判断を一層合理的ならしめるためには、此の小賣販賣高は消費者の消費可能及び消費者の消費量について吾々の持ちうる最上のインジケイターたる「可處分個人所得」及び「個人消費支出」と更に對比せしめられることが必要となる。バターウォース教授が此處に意圖せるところも、實は小賣販賣高をひとり總小賣販賣高に對してのみならず、更に右の二つの尺度と關聯せしめることによつて、經營グループの相對的地位の變化を正しく見究めようとするものに外ならない。かくて教授は先ず「可處分個人所得」、「個人消費支出」並びに「總小賣販賣高」に關する資料から次の如き表を作成する。

可處分個人所得に對する個人消費支出並びに總小賣販賣高の割合及び個人消費支出に對する總小賣販賣高の割合 一九二九年—一九五一年

年 度	可處分個人所得に對する		個人消費支出に對する
	個人消費支出	總小賣販賣高	
一九二九	九五・五	五八・七	六一・五
一九三五	九七・〇	五六・六	五八・四
一九三九	九六・二	五九・九	六二・四
一九四三	七七・二	四八・一	六一・九